



## 「The Heat is ON」

Ross Gelbspan 著

Addison-Wesley Company, 1997年,  
278 pages, US\$23.00

1997年12月の京都におけるCOP3は、改めて、地球温暖化問題の複雑さ、困難さを明らかにしたことと思う。地球温暖化問題が重大化し、政治問題化する中で、「地球温暖化はまやかしてある」と主張する一部の科学者(Skeptics)の存在がクローズアップされてきた。Skepticとは、哲学用語では、懐疑論者を意味するが、ここでは、温暖化問題の存在を否定する論者というような意味であろう。代表的な人物としては、Patrick J. Michaels、バージニア大学環境科学科助教授が挙げられるが、何と言っても気象学会にとって興味深いのは、MIT教授のRichard S. Lindzenである(彼については、後で触れる)。IPCCの第2回報告書を巡るウォールストリートジャーナルなどを通じた特定の著者に対する攻撃の話は聞いたことがあろう(時岡, 1997)。このような特定の科学者の「意図的な」反温暖化攻撃に対する、積極的な温暖化問題支持者のルポルタージュである。

著者のGelbspanは、ピューリツァー賞を受賞したことのあるジャーナリストである。彼は、このような「反温暖化論者」の行動が、エネルギー業界の財政的支援の下に展開されていると指摘する。要するに、「一般的に科学的な議論の形をとりながら、特定のグループの利益を擁護している」と言うわけである。また、特定の共和党議員との癒着も問題にしている。また、著者は、「米国議会の委員会などの証言で、2500人ももの全世界の科学者のreviewを受けたIPCCの報告書の意見が、reviewも受けない1個人の科学者の意見と同等に扱われている」と憤っているが、これなどは「民主主義に於ける少数意見の尊重」の問題や、現在のIPCCのレビューに関する多くの国の人の不満などを考えると、「物事はそんなに簡単では無いよ」と言いたくもなる。

本書には、Lindzenとのinterviewに基づく記事も含まれている(第2章)。これを読む限り、Lindzenは、他の反温暖化論者を「物理が分かっていない」と批判

しており、組織的な一体感は全くないように思われる。著者は、Lindzenに呼ばれて彼の自宅を訪れinterviewを行った。その印象が、「Both he(Lindzen) and his wife are exceedingly gracious and hospitable people. In contrast to his often tortured scientific pronouncements, I found his social and political expressions to be lucid, succinct and unambiguous. Indeed, I found him to be one of the most ideologically extreme individuals I have ever interviewed.」と記述している。Lindzenの主張は、「たとえ、地球が減じようとも、政府が個人の自由を束縛することは認められない」とする信念に基づいているように感じられる。

これらのLindzenに関する記述を見ても、著者は事実に対しては誠実に対応しているジャーナリストの様に感じられる。勿論、本書の中には積極的な個人的な主張が多く述べられるが、それは、著者個人の主張として明瞭に分かる形で記述してある。

内容をタイトルを掲げることによって紹介してみよう。序章は、「Climate Change is here. Now. (気候変化は今、ここに)」, 第1章は、「Of Termites and Computer Models (シロアリと気候モデル) (ここで、シロアリが出てくるのは、90年代最初の暖冬の結果、ニューオリンズで蚊やシロアリなどが増えた、と言う記事を引用しているからである)」, 第2章は、「The Battle for Control of Reality (事実を抑える戦い)」, 第3章は、「A Congressional Book Burning (白熱する議会証言)」, 第4章「The Changing Climate of Business: Boom or Bankruptcy (気候変動ビジネス: 大儲けか破産か)」, 第5章「After Rio: The Swamp of Diplomacy (リオ以降、泥沼の外交)」, 第6章「Headline from the Planet (地球からの証言)」, 第7章「The Coming Permanent State of Emergency (永続する危機がやってくる)」, 第8章「Our Pathway to a Future (未来に向かって)」と言う構成になっている。なお、巻末に、議会の委員会での反温暖化論者の論点に対する、MaCracken, Mahlman, Wigleyなどの陳述が収録されている。アメリカの議会での議論の様子が垣間見られてなかなか興味深い。

本書を一読して非常に強い印象を受けたのは、アメリカでの議論のしつこさである。確かに、石油・石炭業界を背景にしたロビー活動がある。彼らの財政的支援による反温暖化論を世論に訴える活動は、眼を見張る物がある(膨大なお金が使われている)。また、特定の議員に対する政策誘導にもすごいものがある。しか

し、それらを受けて、議会の委員会で議論している(そして、それが報道されている)ということの事実には衝撃を受けた。日本でも、「経済か環境か」というような状況は全く同じだろう。京都会議を巡る通産省と環境庁の対立の背景には、「21世紀の日本のあり方を巡るの考え方」に関する対立もあるのであろう。しかしながら、議論は政府の審議会などで形式的にされているのであろうが、国民レベルには、全く情報が明らかにされていない事こそ問題にして行かねばならないことであろう。佐和隆光京都大学教授が、岩波新書のあ

とがきで怒っている如く(佐和, 1997), 日本の役所は、「政策について国民の理解を得る」という努力が全く少ないようにも感じられる。

今後の、地球温暖化問題のあり方や、科学と政治の関係を考える意味でも、一読の価値が在ると思う。(東京大学気候システム研究センター 住 明正)

佐和隆光, 1997: 地球温暖化を防ぐ, 岩波新書, 217pp.  
 時岡達志, 1997: IPCC 第1作業部会の第2次評価報告書にまつわるエピソード, 天気, 44, 491-493.

### 新刊図書案内

表 題	編 著 者	出 版 者	出版年月	定 価	ISBN	備 考
大阪管区気象台特別調査報告第16号:霧の発生機構把握のための研究	大阪管区気象台	大阪管区気象台	1998.03	非売品 閲覧可		大阪管区気象台 技術部気候・調査課 Tel. 06-949-6308 気象庁図書資料管理室 Tel. 03-3212-8341 内2249
新・天気予報の手引 (改訂29新版)	安齋政雄 日本気象協会	クライム・気象図書出版部	1998.03	¥1,359	4-907664-00-1	
風と波を知る101のコツ: 海辺の気象学入門	森 朗	樞出版社	1998.04	¥1,500	4-87099-164-0	
乱流入門	H. テネクス J.L. ラムリー	東海大学出版会	1998.05	¥3,800	4-486-01440-5	訳者:藤原仁志 荒川忠一
地球温暖化の政治学	竹内敬二	朝日新聞社	1998.06	¥1,200	4-02-259704-6	
わかりやすい天気図の話 (改訂新版)	日本気象協会	クライム・気象図書出版部	1998.06	¥753	4-907664-07-9	
環境科学入門: 地球環境問題と環境シミュレーションの基礎	河村哲也	インデックス出版	1998.07	¥2,000	4-901092-02-2	
高層天気図の利用法: 実地に即した高層天気図の見方 (改訂5新版)	大塚龍蔵 日本気象協会	クライム・気象図書出版部	1998.07	¥2,134	4-907664-12-5	
乱流理論の基礎	後藤俊幸	朝倉書店	1998.07	¥3,800	4-254-13074-0	
理化学英和辞典	小田 稔ほか	研究社	1998.07	¥8,000	4-7674-3456-4	

注:表中で定価はすべて本体価格です。